

2024 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	丹下悠史
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻 博士課程前期課程 修了	修士（教育学）	教育方法学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

「真面目」な人間、すなわち「真に信頼して事を任せうる人材」の育成を包括的な目標として、「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事（つか）うるの職分なり」の精神にもとづき、教育活動を通して学生一人ひとりの目標の実現を支援する。

【目標】

教科の指導力や基礎学力の育成、モチベーションの維持向上等、学生のサポートに努め、大学や学部の特長を生かしたオンリーワンの教員養成を目指す。

【方針】

学生が納得感・達成感を得ながら、講義等で取り扱う専門的知識のみならず、教員ないし社会人として必要とされる諸資質・能力を高めていけるようにする。

【計画（方法）】

学生一人ひとりが自身の達成度を認識し主体的に学習できるよう、課題へのフィードバックや学習内容の外化（議論、発表等）の等、メタ認知の機会を授業の各回に取り入れる。

学生の ICT スキルと計画的な目標遂行能力を向上させるため、Teams 等の ICT ツールを活用し、時間外学習の実質化、授業の活性化を図る。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

教育学概論、人間健康学、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、総合演習Ⅰ、道德教育の指導法（小学校）、倫理学

（後期）

教育方法論（中・高）、教育方法論（幼・小）、教職概論（中・高）、教職実践演習（中・高）、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ、卒業研究、道德教育の指導法（中学校）

○教育方法の実践

学生が道德科の指導法をよりよく理解できるようにするために、既存の授業実践の動画から熟達した教師の意図や指導技術を分析した上で、学習指導案を作成し、相互評価し、選出された学生が行った模擬授業を記録・分析・評価する一連のサイクルを実施した。

○作成した教科書・教材

文部科学省による Web サイト「道德授業アーカイブ」の授業動画に対応した分析ワークシートを作成した。具体的には、動画中の教師の発問、重要な場面の発言の記録、特定の発問のはたらきの解釈、そしてそれらについて他の学生と意見を共有した成果を書き込むものとなっている。

○自己評価

学生による授業評価アンケートの対象になった科目では、回答者が少なかったものの、評価平均はほとんどの項目が 4.5 以上であり、学生の満足度は高かったと思われる。自由記述も教員の熱意などを評価するコメントが複数あり、改善点等の指摘はなかった。

授業を行う中で見られた学生の反応として、課題に取り組む際難しそうにしていた姿もあったため、各科目で受講生のレディネスを把握し適切な教材づくり・授業進行に務めたい。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

学習対象への自我関与に着目した道德教育の分析・評価手法の開発

○目標・計画

【目標】

小学校および中学校の道德授業における子どもの発言や記述から、その内容の背後に介在する道德的価値観・判断の特質や、授業を通したそれら相互の影響関係を可視化する手法を開発することで、道德授業における自我関与の成立要因を明らかにする。また、開発された手法を応用し、教師がそれを用いることで子どもの学習の過程を詳細に把握し評価することのできる研修方法を構築する。

【計画】

道德教育学、倫理学、心理学といった道德教育に関連する諸分野の文献を検討し、教育実践の分析手法の基礎となる道德判断の理論的モデルを構築する。

研究成果の報告を、所属学会や東邦学誌等の場において積極的に行う。

理論的モデルにもとづく実践改善、手法の見直しのため、小中学校の授業を対象とした調査を行う。

○2017 年 4 月から 2025 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・丹下悠史（2024）「板書」（p.142）「発問分析」（p.160）『教育方法学辞典』学文社
- ・丹下悠史（2024）「第 6 章 道德の理論及び指導法におけるアクティブ・ラーニング」愛知東邦大学地域創造研究所編『教員養成におけるアクティブ・ラーニングの実践研究』唯学書房,89-104
- ・丹下悠史（2023）「第 18 章 豊かな学びを保障する教育を目指して」西尾敦史・大勝志津穂・尚爾華編著『人間健康学』唯学書房,200-209

（学術論文）

- ・柴田好章・丹下悠史・水野正朗・埜寄志保・花里真吾・坂本将暢（2024）「問題解決学習に特有の思考様式の間項を用いた授業分析による解明：発言の意図・含意の解釈の客観的表現」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』71(1),81-92.
- ・坂本将暢・丹下悠史・柴田好章・埜寄志保・徐曼・向井昌紀・石黒慎二・水野正朗・副島孝・胡田裕教・清水克博・中島淑子・花里真吾・田中眞帆・ファウザン アーダン ヌサントラ・久川慶貴・久留島夕紀・小國翔平・王瀟・寺田実智子（2020）「授業における子どもの認識の展開過程の可視化：オントロジーを利用して」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』66(2),157-172.
- ・菊池美由紀・須田昂宏・丹下悠史・村上恭子（2019）「リアクションペーパーから見る学びの実態と思考を促す要因 ——国立工科大学におけるキャリア科目を事例として」『大学教育学会誌』41(1),147-156.

- ・丹下悠史（2018）「道德教育における読み物資料のモデルとしての機能」『平成 28 年度 大学院生の教科書研究論文助成金論文集』公益財団法人教科書研究センター。
- ・丹下悠史（2017）「道德教育における教師の授業洞察力を高める研修方法の開発」『東邦学誌』46(2), 159-168.
- ・小出禎子・丹下悠史（2017）「小中連携教育における学校経営--校長から見た「子どもの学び」と「教師の学習」に関する意義と課題を中心に」『東邦学誌』46(1),17-27.

（学会発表）

- ・Tange Y, “Development of an analytical method for moral education in elementary and junior high schools focusing on students' "ego involvement"” The World Association of Lesson Studies International Conference 2023
- ・柴田好章・水野正朗・小倉弘之・林文通・林エミ・土屋花琳・丹下悠史・花里真吾・王瀟・大岩俊之・朱誉・西浦明倫・廉賀・埜寄志保（2023）「問題解決学習における思考の相互関連－中間項を用いた思考様式の顕在化を通して－」日本教育方法学会第 59 回大会
- ・埜寄志保・丹下悠史・水野正朗・ほか（2022）「問題解決学習における解決の見通しの構成に関わる諸要因の関連構造－中間項を用いた子どもの思考過程の再構成を通して－」日本教育方法学会第 58 回大会
- ・柴田好章・坂本將暢・埜寄志保・岩崎公弥子・丹下悠史・田中眞帆・王瀟・鈴木正幸・石原正敬・水野正朗・花里真吾・ファウザン アーダン ヌサンタラ・王芳序（2021）「協同的な探究における子どもの多面的・多角的な思考様式の解明－中間項を用いた潜在的諸要因の関連構造の明示化を通して－」日本教育方法学会第 57 回大会
- ・柴田好章・丹下悠史・田中眞帆・石原正敬・水野正朗・埜寄志保・花里真吾・坂本將暢（2020）「中間項を用いた授業分析による発言の意図・含意・文脈の解明」日本教育方法学会第 56 回大会
- ・坂本將暢・丹下悠史・柴田好章・埜寄志保・水野正朗・向井昌紀・石黒慎二・徐曼（2019）「授業における子どもの認識の展開過程の可視化－オントロジーを利用して－」日本教育方法学会第 55 回大会
- ・丹下悠史（2019）「道德教育における子どもの自我関与の分析と評価」中部教育学会第 68 回大会
- ・坂本將暢・丹下悠史・柴田好章・埜寄志保・水野正朗・向井昌紀・石黒慎二・徐曼（2019）「授業における子どもの認識の展開過程の可視化－オントロジーを利用して－」日本教育方法学会第 55 回大会
- ・丹下悠史（2018）「学習対象への自我関与を通じた子どもの価値観の形成－地域社会の問題を追究する中学校公民の授業を事例に」日本教育方法学会第 54 回大会
- ・Kikuchi M, Suda T, Tange Y, Murakami K, “An Analysis of student' learning in career course with comment sheets” The World Association of Lesson Studies International Conference 2017
- ・菊池美由紀・須田昂宏・丹下悠史・村上恭子（2017）「大学のキャリア科目における学生の学びの可視化－コメントペーパーの分析を通して」日本キャリア教育学会第 39 回研究大会

（特許）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・科学研究費補助金、基盤研究(C)、課題番号 21K02228 「道德判断の様相に着目した道德授業の分析手法の開発」研究代表者：丹下悠史（2021 年 4 月－2025 年 3 月）

○所属学会

- ・中部教育学会
- ・日本教育方法学会
- ・日本教育学会

○自己評価

・成果を十分に報告できていないが、本年度はフィールド調査を複数回行うことができ、今後の研究の進展に資する1年になったと考える。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

学部学科、委員会、全学的業務といった各領域において与えられた役割を十全に遂行する。

【計画】

所属学部、委員会、その他ワーキンググループ等の目標に則し、また授業等を通して学生の要望を収集しながら、積極的に運営に参加する。

○学内委員等

教職支援センター運営委員会、人間健康学部部会、教務委員会（副委員長）、IR推進委員会

○自己評価

教務委員会で副委員長を務めた他、複数の委員会において管轄する業務について積極的に参画した。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

研究成果を研究職や教育職のコミュニティ、市民社会において広く共有する。また、共有の結果得られたフィードバックを研究課題に反映させ、社会的重要性の高い研究課題の設定に努める。

【計画】

所属する国内、国際学会での研究発表を通して、研究成果を共有する。研究会等の参加・運営を通して教師と協同し学校教育の改善に努める。看護職従事者への臨地実習指導者講習等、他業種の人々に対し、研究の知見を生かして貢献する。

○学会活動等

- ・全国私立大学教職課程協会 理事
- ・東海・北陸地区私立大学教職課程研究連絡懇談会 代表世話人

○地域連携・社会貢献等

- ・愛知県看護研修センター 愛知県臨地実習指導者講習会（特定分野）「教育方法」講師（2020～）
- ・社会科の初志をつらぬく会 東海研究部 事務局長（2021～）
- ・愛知県総合教育センター 高等学校中堅教諭等資質向上研修（後期）「産業教育における評価の在り方」講師（2023～）

○自己評価

今年度より東海・北陸地区私立大学教職課程研究連絡懇談会の代表世話人ならびに全国私立大学教職課程協会の理事を務めることとなった。同僚の教職員や他大学の教員の協力を得て、最低限の責務は果たせたと考えている。今後は地区や全国の私立大学教職課程とのつながりを本学の教職課

程運営に活かせるよう努めたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

博士論文を構成する研究に集中的に取り組むことで、研究者としての基礎的な資質・能力の研鑽に努める。

VI 総括

本年度は、学生一人ひとりの学びを大切にしながら、主体的に学べる授業づくりに取り組んだ。研究では実践と理論の往還を意識し、道德教育の分析手法の開発を進めた。学内外の組織に委員や講師としても積極的にに関わり、多くの人々との協働を通じて視野を広げることができた。今後も教育・研究・社会貢献のバランスを保ちつつ、自らの役割を果たしたい。

以 上